

新約聖書注解シリーズ

# ローマ人への手紙

J.B.カー

PAUL'S EPISTLE TO THE ROMANS

An Exposition

by

James B. Currie

新約聖書注解シリーズ

# ローマ人への手紙

J.B.カリー

一節一節の詳細な解説

伝道出版社

# PAUL'S EPISTLE TO THE ROMANS

An Exposition

by

James B. Currie

This exposition is dedicated to  
Miss Hisako Morita  
who, in things Japanese, has been my mentor  
for many years and without whose editorial  
skills this book would never have been published.

EVANGELICAL PUBLISHERS  
Tokyo, Japan

## 序言

ギリシャやローマの時代に書かれたものの中で、パウロの記した「ローマ人への手紙」ほど、大勢の人々に影響を与えたものはほかにありません。人間に関する神のお取り扱ひの解釈として、これは類ない書簡です。それゆえ、古来から「人の罪と神の救い」という問題についてよく理解したいと願った人は、例外なくこの書簡を熱心に調べたのです。

「私たちの主イエス・キリストの福音」を宣べ伝えることを熱望している人に対して、「『ローマ人への手紙』の教えに没頭しなさい」というのはすばらしいアドバイスです。この書を十分に理解もしないまま、公の場で神の福音を説明しようとする人は、実に大胆きわまりないと言えるでしょう。

私は、このような確信に従って、日本の愛する兄弟姉妹たちに、「ローマ人への手紙」の重要性を新たに認識していただきたく、この解説を書きはじめました。執筆にあたり、自分の不十分な点をよく感じました。このわけで、十分に資格のある兄弟たちの書物を参

照しました。注意深い読者には、このことは一目瞭然でしょう。しかし、この本に何らかの落ち度があれば、それはもちろん著者である私の責任です。

さまざまな学び会の場や、あるいはこのような文書の形式で、御民に仕えることによつて主にも仕えさせていただくことのできる、計り知れない特権のために心から感謝を申し上げます。この注解を読まれるすべての方々の上に豊かな祝福がございますように。また私たちの主イエス・キリストの御名に栄光が帰されますよう、切にお祈りいたします。

一九九五年 七月

東京・府中市にて

J・B・カリ

# 目次

序言	三
はじめのことば	七
A 一章〜八章 教義の部分	
一章 汚れた人	二二三
二章 弁解の余地のない人	二五二
三章 さばきの下にある人	二七五
四章 罪が赦された人	二一一
五章 義と認められた人	二三七
六章 罪から解放された人	二六三
七章 みじめな人	一九八
八章 勝利を得た人	二三八

B 九章〜十一章 時代的な部分

九章 イスラエルの選び	二九〇
一〇章 イスラエルの違反	三二九
十一章 イスラエルの回復	三五六

C 一二章〜一六章 実践的な部分

一二章 パウロの懇願	三九三
一三章 パウロの戒め	四一五
一四章 パウロの断言	四三九
一五章 パウロの確信	四六六
一六章 個人的なあいさつ	四九六

〈お断り〉本書での引用聖句は、一部が著者の私訳になっています。

## はじめのことば

### ローマ市

パウロが「ローマ人への手紙」を書いたときは、ローマ市はすでに八百年を経過しており、その人口は百五十万に達していました。パウロの時代のローマ市は、それまでの歴史においてどこにも見られなかったほどの偉大な帝国の中心地でした。

古代のローマ市は、テベル川が流れる谷に居住地が広がり、その周囲を七つの山が取り囲んでいました。したがってここは、北にいるエトリア人と南にいるギリシャ人との間を行き来する商人が行きかう地点でした。交通の多い通商路のまん中にあるこの居住地が、ローマ帝国出現以前から重要な地点であったことは容易にうなずけます。このテベル川のほとりにあったいくつかの小さなグループが同盟を結んだのは、使徒パウロの時代より六百年ほど前だったと思われます。自分たちよりも強い、多くの敵に囲まれていたこの小さな同盟者たちは、早くから自衛力を身につけなければなりませんでした。この軍事力が、



南および中央ヨーロッパから、北アフリカおよびアジアのユーフラテス川にまで広がる帝国を生み出していったのです。この帝国の首都ローマ市には、二千五百年以上にわたって人が住み続けてきましたが、この都が人類に与えた影響は計りしれません。

新約聖書時代以前のローマ市には貧しい人々があふれていました。しかし、市の役人たちはみな、裕福な生活をしていました。彼らはその富を、ローマ市に移住してくるたくさんの人々に食料、衣料、住宅などの生活必需品を売ることによって、築いたので。ローマ市の力と影響が広がるにしたがって、彼らの富も増えていきました。どの時代の皇帝たちも、きそって、ローマの都をぜいたくに満ちた、富んだ都にしようとしたが、そのいろいろな証拠が、考古学者によって発見されています。にもかかわらず、使徒時代の貧しい人々の状態は、口では表現できないほどひどいものでした。パウロは、紀元五十九年ごろ、カイザルの裁判所へ行く途中で、ローマ市の南部にある何千軒ものあばら屋を見たはずです。その貧民街に住んでいたのは、九割までが貧しいユダヤ人でした。言うまでもなく、当ても、力ある金持ちのユダヤ人はたくさんいましたが、彼らの邸宅は、ローマ市の別の場所にあったのです。

パウロの時代には、「文明世界」全体がローマの影響下にありました。すべての道は

ローマに通じる”という格言がありますが、これは今日でもよく用いられています。これは単なることばの表現ではなく、ローマの軍隊が、驚異的なスピードで帝国の隅々にまで行けるように、道路がよく整備されていたことと関係があります。今日のヨーロッパのいくつかの街道は、昔のローマの、その道路の上に造られています。また、昔のローマの道は、比較的安全な旅を保障しました。さらに、アレキサンダー大王がローマを征服した結果、帝国全体でギリシャ語がリング・フランカ（商人などが国際語として広く用いた語）として用いられるようになったこともあって、帝国内の諸国の人々は、ローマ市を中心に、たえず旅行していました。

ローマは巨大な、活動的な都市でしたが、庶民の中には大きな不満を持っている者もいました。こういう市民は、政府に対してさまざまな要求をし、反逆行為に出ることも珍しくありませんでした。それを鎮圧するために、目をおおうような殺りくが行われましたが、それはどの皇帝にとつても、たいへん高くつく教訓となりました。現在の統治者が、自分の貪欲と無能をユダヤ人のせいにし、彼らを身代わりの羊としているように、昔もユダヤ人は、ローマ市から追放され、その財産を残らず没収されることがありました（使徒一八・2）。